

「下関の伝承遊び」について

—— アンケート調査と実践 ——

川野都*・花岡康次郎

The Oral Tradition of Shimonoseki's Games and Recreation Putting Questionnaire Opinion and Other Ideas into Practice

by

Miyako Kawano* and Kojiro Hanaoka

キーワード：遊び、自由遊び、昔遊び、異年齢交流、幼児の環境、わらべうた、子ども、下関

1. はじめに

幼児期の子どもにとって、遊びは生活そのものである。成長、発達の過程で遊びを通して様々なことを学びとっていく。言い換えれば、幼児期の遊びは人間形成の基礎を培う重要な役目を担っていると言える。一方で子どもたちは置かれた環境に大きく影響を受けながら生活している。従って遊びと幼児の環境は密接な関わりを持っていると言えるのではないかと考える。

そこで、平成20年度の花岡・高杉ゼミナールでは、現代の子どもたちの遊びについて探ってみた。ゼミナールの全体テーマを「正月行事や子どもの遊びを通し言葉と文化を考える」として取り組んだ。日本文化を振り返ると「ハレ（晴れ）」と「ケ（褻）」の文化の継承に行き当たったのだが、日常であるケ（褻）に対し、祭礼や年中行事などハレ（晴れ）がある。子どもたちの遊びも「ハレ」の正月には凧揚げやコマ回しなど伝統の遊びがある。日本文化の中で継承されている遊びは他にもあるのではないかと、あるとすればどのような遊びか。キーワードとして出てきたのが「伝承遊び」である。ゼミナールでの取り組みに、更に今年（平成21年）の実習時の実践を加えて報告する。

1950年代～70年代の高度経済成長期を経て時代の大きな変化と共に、子どもたちの遊びの態様が著しく変わってきているとされる。それは、子どもを取り巻く社会全体の変化をそのまま投影している。

社会変化の一つとして子どもたちの遊びの中で「三間」の喪失が言われて久しい。「三間」

* 保育学科2年在学（社会人）・下関市社会教育委員

とは「時間・空間・仲間」である。かつて子どもたちは、地域にある空き地や、川、裏山、小学校の校庭など子どもだけで遊ぶことのできる空間を使い、日が暮れるまで、仲間と遊んでいた。当時は習い事をする子どもの方が圧倒的に少なかった。

同時に子ども達の側にも変化が見られる。遊ぶ仲間も兄弟も含め異年齢の関わりが多く、4～5人から10人程度の群れで構成されていたが、現代の子どもたちからは群れて遊ぶ姿が見られなくなってきた。これは主に学童期の子どもたちに見られることであるが、幼児期の子どもたちにとっても、置かれた環境は同様に変化してきている。幼児が小学生の兄弟と一緒に他の異年齢の仲間と遊ぶ姿を見ることはなくなってきた。現代、幼児は常に親や保育者など大人の目の届く場所、つまり、安全安心が保障された中で遊んでいる。それは、相次ぐ不審者による犯罪や、車社会の事故防止、遊び場となっていた空き地の減少、親の就業など要因は様々ある。

幼児期、子どもの育ちを支えるのは遊びである。子どもは遊びを通して、自らの身体と知恵を十分に働かせ遊びに没頭する中で、更に運動能力を向上させ、知識を取り入れながら知恵を言語化し、人間関係を育てていく。そこには小さな社会があり、道徳性も育まれていく。

実際に厚生労働省・文部科学省の保育の捉え方をみると、保育所保育指針「第2章 子どもの発達・1 乳幼児期の発達の特性」の中で「子どもは、遊びを通して、仲間との関係を育み、その中で個の成長も促される。」とある。幼稚園教育要領「第1章 総則・第1 幼稚園教育の基本」の中にも「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。」とある。つまり、遊びは幼児期の子どもの置かれた環境が家庭、保育所、幼稚園を問わず、その発達の過程で重要な意味を持つことが示されている。

しかし、＜子どもの健全な成長を支える遊び＞を具体的に考えた時、現代のバーチャルな遊びは当てはまるだろうか。メディアとの接触は低年齢でも長時間に渡り、その影響が心配されている。2004年2月には(社)日本小児科医会が子どもとメディアについて「5つの提言」を発表している。

「5つの提言」とは、「2歳までのテレビ・ビデオの視聴は控え、すべてのメディアへ接触する総時間を制限する」など、メディアコントロールへの具体的な提言である。2007年1月には、全国の小児科医へ向けて、小児科医のためのハンドブック『子どもとメディア—乳幼児を中心として—』を発行している。ハンドブックの執筆者の一人、小児科医の神山潤氏は「メディア漬けが及ぼす眠りへの悪影響」を指摘している。＜現代は子どもたちの置かれた環境の中に体験を伴わないバーチャルなメディアが入り込み、時間を問わず接触可能な遊び（メディアとの接触）が夜更かしに繋がり、睡眠不足となり、朝起きられず、朝食も疎かになり、健康を損なう可能性がある。子どもが基本的な生活習慣を身につける上で問題である＞ということだ。

更に「質の良い、発達に見合った十分な睡眠をとることができなければ、日中の子どもの活動が意欲的に行われることは難しい」という。子どもたちにとっての遊びがその成長・発達において重要な意味を持ち、集団形成、創造性、感受性、主体的社会性など「生きる力」の基礎を培うものであれば、遊びの質、内容が問われるということだろう。

今、子どもが「子どもらしく」育つことが難しくなっている。「子どもらしく」とは、子ども期に必要な子どもとしての育ちの積み重ねではないだろうか。保育所保育指針「第1章 総則・3 保育の原理」には「保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために（後略）」とある。また、幼稚園教育要領「第1章 総則・第1 幼稚園教育の基本」の冒頭に「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、（中略）幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」とも書かれている。

筆者は、子どもの育ちに直接関わる保育者の遊びの捉え方が、保育の姿勢に影響してくるのではないかと考えている。そこには保育者自身の遊びの体験の違いも考えられる。しかし、保育者の体験の違いで、子どもたちの遊びが貧弱なものになってはならないであろう。

誰もが、何処でも（地域を超えて）親しめる遊び、子どもの育ちを支える共通の遊びには何かがあるのかと考えた時、昔から遊び継がれてきた「伝承遊び」が挙げられるのではないだろうか。「伝承遊び」を保育に取り入れることは保育者の遊びの捉え方が豊かになるのではないかと考える。

本稿でいう「伝承遊び」とは、『現代保育用語辞典』「伝承遊びは、子どもがだれかから教えられたわけではないのに群れて遊んできた遊び（鬼ごっこ、通りゃんせ、かごめかごめ、こま、お手玉など）の総称である。（以下省略）」をいう。

また、伝承遊びに伴うものとして「わらべうた」（わらべ歌、わらべ唄等表記が異なるが、本稿では「わらべうた」と表記）が挙げられる。

日本わらべ歌全集19下『山口のわらべ歌』には「1. 遊びのはじめ、2. 手まり歌、3. 羽根つき歌お手玉歌、4. 手遊び歌、5. 鬼遊び歌、6. 縄とび歌、7. 外遊び歌、8. 自然の歌、9. 動物植物の歌、10. 歳時歌、11. ことば遊び歌、12. 子守唄」と12の分類が行われ、実に215曲もの「わらべうた」が紹介されている。加えて『新講 わらべ唄風土記』の序説には「わらべ唄には、動植物、天象、歳事から子供の生活全体に亙って投げられる童詞わらべことばの類も多く、それらは種々の囃し唄から悪口唄のようなものにまで発展している。（以下省略）」とあり、これらの分類に見られるように、「わらべうた」は伝承される遊びと共にあり、歌いながら遊びが成り立つものも数多くある。従って本稿では「わらべうた」は「伝承遊び」の一つとして捉えたい。

伝承ということは、地域によって特徴的な遊び、遊びの名前やルールの違いなどが考えられる。では、下関の「伝承遊び」は、子どもたちの遊びの中でどのくらい遊び継がれているのだろうか。下関の「伝承遊び」については『下関市史 民俗編』の「子どもの遊びの変容」の項にいくつか紹介されている。例えば「ネングイ（木をさして相手の木を倒す遊び）・トツタリ（草と草を結んで年寄りの足を引っ掛けて倒したりの悪戯）・石を10個拾い油で磨き白い袋に入れ、石を掴んで数の当てっこ・ムギ、アズキ、石、砂などを入れたお手玉・ネンガラ・こま・竹馬・タスケオニゴ・手づくりの竹とんぼ・水鉄砲・ヨノミ鉄砲・紙鉄砲・草笛」等様々である。

しかし、これらの遊びの紹介の後、「次に、阿内に暮らすある老人に、子どもの時代の遊びと現在の子どもの遊びを比較して意見を求めてみた。今の子どもからは遊びが姿を消した。だいいち遊ぶ場所がないし、社会的規制がきびしい。」と、続くのである。

他方、下関市保育連盟からは『下関の伝承あそび』が平成7年に発行された。平成16年には第2版を「わらべうた」「なつかしいあそび」「赤ちゃんことば」「あそびのフォトアルバム」の4部構成で発行。平成7年秋、下関市において開催された「中国・四国地区音楽研究山口大会」を機に第1版、その後保育連盟の保育士たちが研修会を経て第2版の発行となっている。昨年、編集にも携わった下関市立千草保育園の岡山つき子園長に直接話を伺ったところ、「(当時の)保育士たちは、多忙な勤務の中、時間を遣り繰りし、主体的な参加で非常に熱心に研修会等を重ねてこの本を出版した」とのことであった。実際に本を繙くと、保育士たちが書籍に託した伝承遊びへの思いが溢れている。本文の「あそびのフォトアルバム」の項にある各園の伝承遊びの様子を撮影した写真には、子どもたちの弾ける様な笑顔と遊び込む姿が写し撮られている。

しかしながら、前述のように子どもを取り巻く環境は刻々と変化してきており、現況を把握することができない。そこで筆者は〈現在の子どもの状況はどうであるのか〉〈保育の現場ではどのような取り組みがなされているのか〉〈今後、保育士を目指す保育学科の学生は、その子ども期にどのように遊んでいたのか〉〈他の世代はどうであったか〉等を含めて「伝承遊び」をキーワードにアンケート調査を行った。

2. 「下関の伝承遊び」アンケート調査

2・1 アンケート調査の目的

下関における「伝承遊び」について、世代間での伝承の違い、保育所や幼稚園の「伝承遊び」の取り組みの現状等、実態を把握すべくアンケート調査を実施することとした。調査にあたり、ゼミナールの全体テーマ「正月行事や子どもの遊びを通し言葉と文化を考える」を考慮し、個人アンケートの設問は「冬の遊び」とした。

2・2 アンケート調査

- ・実施時期：平成20年9月～10月
- ・対象（個人）：乳幼児期～学童期にかけて下関市に居住していた学生（本学保育学科1年）、保護者、本学職員など直接手渡しで依頼
（団体）：下関市内の保育所、幼稚園に郵送で依頼
- ・依頼数（個人）：50名
（団体）：保育所・幼稚園 合計11園
- ・アンケート内容：図1、図2参照

「下関の伝承遊び」についてのアンケート

1. あなたの年齢と性別を教えてください。(○印)
10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代・80代以上 女・男

2. あなたの子ども時代（小学校くらいまで）の冬の遊びについてお尋ねします。
(遊びの名前が分からない場合は簡単な遊び方をお書きください)

遊びの名前	天候	人数	場所	遊び方
██████████	██████████ ■	██████████	██████████	██████████ ██████████

3. 子ども時代の遊びで心に残る出来事がありましたらお書きください。

4. 古くから遊び継がれているものを知っていますか？
また、今の子どもの遊びで知っているものがあればお書きください。

図1 個人配布アンケート（本紙はA4・1枚）

「下関の伝承遊び」についてのアンケート

1. 貴園で取り入れている伝承遊びがあれば教えてください。

(遊びの名前)	(室内・外)	(同・異年齢)	(プログラム:自由保育、行事など)	(保育時の配慮など)
██████████ ■	■	■	██████████	██████████ ██████████

2. 保育に伝承遊びを取り入れることで、子どもの発達に良いと思われる点がありましたら教えてください。

図2 保育所・幼稚園配布アンケート（本紙はA4・1枚）

2・3 アンケート調査実施・集計

前述の内容でアンケートを実施したところ、回答率は個人64%、保育所・幼稚園は合わせて70%となった。

アンケートを実施する際、学生の中には『伝承遊び』がどのような遊びを指すのか分からない」という声も少なからずあったため、具体的に遊びの名称や遊び方の例を挙げながら手渡しで依頼した。配布時の留意点としては、子ども時代を下関で過ごしたことを確認した上で協力を求めた。回収はその場での手渡しと、後日手渡しで頂いた。

保育所・幼稚園については市内のリストより無作為に選出し、郵送と電話にてアンケートへの協力を依頼し回答は郵送して頂いた。集計結果を表1、表2にまとめた。

3. 分析

個人アンケートの回答全体からの第一印象は、遊びの種類が多さで44種類もの遊びが集計されたことである。雨以外の天候と、何時でも（天候に左右されない）と回答された外の環境を利用した遊びは、38種類。缶けり、ゴムとび、かくれんぼは世代を超えて遊び継がれている。同時に個人アンケートでは世代により具体的記述に差があり、「設問3 子ども時代の遊び」で「心に残る出来事」への50～70代の記述は、他の世代と比べ具体的に記入されており、その内容からは子ども時代の遊びの環境や心情面を窺うことのできる記述が多い。保育所・幼稚園からの回答では、「設問2」「保育に伝承遊びを取り入れることで、発達に良いと思われる点」への回答は、1園を除く他の全ての園で詳細に記入されている。以下、集計者が気付いた項目に沿って分析を行う。

「個人回答」（表1参照）

①「設問2 あなたの子ども時代（小学校くらいまでの）冬の遊び」

- ・「遊びの種類」 種類が多く大別すると、鬼を決めて遊ぶ鬼遊び、技や勝負を競う遊び、ごっこ遊び、ふれあい遊び、その他の5つに分けられる。
- ・「遊ぶ人数」 5人以上で成り立つと答えた遊びの種類が多く、次いで2人以上となっている。回答数の多い遊びも5人以上である。
- ・「遊ぶ場所」 最も多いのは空き地、次いで室内、園庭、運動場となっている。2番目に多い室内だが、室内のみということではなく室内と外を併記しており、「お手玉、お絵かき・ぬり絵、あしずもう、リリアン」については室内のみ回答。
- ・「遊びのルールや遊び方」 回答された遊びの多くが幼児にも理解できるような簡単なルールであり、遊び方も異年齢がハンディキャップとならない遊び方ができるものである。

下関の伝承遊びについて

表1. 下関の伝承遊びアンケート集計

分類：屋外=1、室内=2、両方=3 何時でも=A、雨以外=B、その他=C
 年代：10代=1、20代=2、30代=3、40代=4、50代=5、60代=6、70代=7、80代以上=8
 アンケート回収数：32人 ※遊びの種類、天候、場所は複数回答あり

分類	遊びの名前	天候	人数	場所	年代	性別	回答数
1	缶けり	B	5～	空き地、園庭、お寺、境内	1、2、4、5	女・男	5
1	ゴムとび	A、B	5～	空き地	2、4、5、6	女	5
3	お母さんごっこ、家族ごっこ	A	2～	家、外(公園など)	1	女	3
3	かくれんぼ	A	5～	家、空き地、学校、公園	1、4、5	女・男	3
3	めんこ(パッチン)	B	2～	室内、空き地	4、5	女・男	3
3	おしくらまんじゅう	B	5～	空き地、運動場、教室	5、6	女・男	3
1	Sケン	B	5～	学校(運動場)	1、4	女	2
1	助けおに	B	5～	グラウンド、空き地、園庭	1、2	女・男	2
3	ままごと	B	2～	何処でも、田んぼ	2、3	女	2
3	あやとり	A	1～	室内、外	2、5	女	2
1	雪合戦	C	5～	運動場、田畑	5	女・男	2
2	お手玉	A	1～	室内	5、6	女	2
1	ケンパー	B	1～	空き地など	5、6	女	2
3	ボール(まり)遊び	B	1～	廊下、室内、外	5、6	女	2
1	あぶくたった	B	5～	公園、グラウンド	1	女	1
1	あんたがたごさ	B	1～	家の庭	1	女	1
1	いちにトライ	B	2～	階段	1	女	1
1	警ドロ	B	5～	広ければ何処でも	1	男	1
2	お絵かき、ぬり絵	A	1～	室内	1	女	1
1	おひっこし	B	5～	空き地	1	女	1
1	けた	B	2～	空き地	1	女	1
1	ねこどん	B	5～	空き地	1	女	1
2	あしずもう	A	2～	室内	1	女	1
1	氷おに	B	5～	園庭	2	女	1
1	色つきおに	B	5～	園庭	2	女	1
1	ぶっけ	B	10～	空き地、園庭	2	男	1
1	そりすべり	B	1～	公園土手	2	男	1
1	石蹴り	B	2～	庭、運動場	4	女	1
1	なんごのしょ	A	2～	学校の帰り道	4	女	1
1	草の実でアクセサリー作り	B	2～	学校の帰り道	4	女	1
1	はないちもんめ	B	5～	空き地、運動場	4	女	1
1	どっかん	B	5～	空き地、運動場	4	女	1
1	ダルマさんがころんだ	B	5～	お寺	4	女	1
1	馬とび	B	5～	庭	5	男	1
1	凧揚げ	B	1～	空き地、田んぼ	5	男	1
1	釘立て	B	2～	空き地	5	男	1
1	ビー玉	B	2～	空き地	5	男	1
3	陣取り	A	2～	外(地面)、室内(紙)	5	女	1
1	グリコ	A	2～	階段、平地	5	女	1
1	世界一周	B	2～	空き地など	5	女	1
1	落とし穴作り	B	1～	空き地、道	5	女	1
1	おにごっこ	B	5～	外	6	女	1
3	縄跳び	A	1～	室内(屋根)、外	6	女	1
2	リリアン	A	1～	室内	6	女	1

分類(遊びの種類は44)：1=31、2=4、3=9

天候：A=12、B=32、C=1

人数：1～=11、2～=14、5～=18、10～=1

2008年11月集計：川野 都

表2. 下関の伝承遊びアンケート集計：保育所・幼稚園

分類：屋外＝外、室内＝内、両方＝両

年齢：同年＝A、異年齢＝B、両方＝C

プログラム：自由遊び＝自、設定保育＝設、その他＝そ

アンケート回収数：8園 ※遊びの種類(名前)は8園全て複数回答

分類	遊びの名前	年齢	プログラム	回答数	保育時の配慮など
両	花いちもんめ	C	自	4	前後の動きが十分できる広さ、砂を蹴らない、何度も同じ子どもにならない
外	長縄(大縄)	C	自	4	広い場所、縄が子どもに当たらないよう気をつける、正しい飛び方の指導、人や物にぶつからない
両	あぶくたった	C	自	4	広い場所、ことばのリズム、友だちとぶつからない
内	ハンカチ落とし	C	設、そ	3	障害物(机や椅子)の無い場所、ルールの説明
外	ぐるぐる(渦巻き)じゃんけん	C	自	3	他の遊びの邪魔にならないよう園庭の端を使う、大きな声で「負けた!」と言う
両	ゴムとび	C	設	2	一人ひとりの能力に合わせて目標設定、順番に並ぶ、小さい子がする時はマットを敷く
両	お寺の和尚さん	C	自、そ	3	二人組がうまく作れるように配慮、ことばのリズム、テンポ、顔が見えるよう向き合う、手合わせできなくても曲の雰囲気を楽しむ、押し合わない
両	けんけんぱー	C	自	3	広い場所、前の人にぶつからない、並んで順番、転倒に備え側で見守り、ラインが見えやすいよう石灰または水で描く
外	おにごっこ	C	自	2	ルールを伝える、広い場所、未満児の居ない、時、場所
両	かごめかごめ	C	自	1	分かりにくい時はヒントを出す、年齢に合わせて展開、異年齢の時は保育者も一緒に入り遊び方を伝える
内	カルタ	C	自	1	始めにルールを確認し合う、絵札が見やすいよう広げる
内	絵かき歌	C	自、設	1	子どもに合わせて援助、皆が楽しめるよう考慮
内	こま	A	設	1	製作のため各年齢にあった道具の準備
両	すもう	A	自	1	腰を低くする、顔にはり手をしないよう事前に話す
両	正月遊び(羽根突、福笑、こま)	C	自	1	こまは人に向かって投げない、回せるようになるまでに飽きてしまわないよう必要に応じ援助
外	雪遊び	C	自	1	けがに注意、自然を肌で感じられるようにする
外	ぼっくり	C	自	1	紐の長さの調整、けがのないよう広い場所
外、内、両	わらべうた遊びその他	B、C	自、設、そ	22	異年齢では年長児がリードする、力を入れすぎない、テンポ、未満児にはゆっくり繰り返しする

分類(遊びの種類は38)：屋外＝8、室内＝16、両方＝17

年齢：同年齢(A)＝2、異年齢(B)＝1、両方(C)＝36

プログラム：自遊遊び＝37、設定保育＝5、その他(行事、活動の前後)＝10

2020年11月 集計：川野 都

- ・「遊びの道具、素材」 外遊びでは現地調達するもの（ままごと、お母さんごっこなど）、目的を決めて遊ぶ時などは準備してくるもの（缶けりの缶やゴムとびのゴム、めんこなど）、環境を利用する（かくれんぼ、Sケンなど）ものに分類できるが、どの場合でも、子ども自身の手ですぐに準備できるものばかりである。

②「設問3 子ども時代の遊びで心に残る出来事」

- ・「男女みんなと一緒に遊んでいた、異年齢で遊び、年上の子どもが年下をかばうように遊んでいた、年下は大きい子を尊敬していたようだ」など、男女に関係なく異年齢での遊びの様子とその関わりからの印象を記述。
- ・心に残る出来事は、50代以上の年代での記入が多く、子ども時代への郷愁が述べられている。
- ・50代～70代の回答の中には、「昔は雪がよく降っていたので」雪遊びをしていたと記されるが、他の世代にはみられなかった。

③「設問4 今の子どもの遊びで知っているもの」

- ・おにごっこ、かくれんぼ、お母さんごっこ、警ドロなど「伝承遊び」に加え、サッカー、ドッチボール、フラフープ、ポケモンごっこ。複数回答としてゲーム。

個人アンケートからは以上のようなことが特徴的なこととして挙げられる。

「保育所・幼稚園回答」（表2参照）

①「設問1 取り入れている伝承遊び」

- ・「遊ぶ場所」 室内、外、両方がほぼ同数。
- ・「遊ぶ年齢」 同年齢と答えたのは2件。1件は設定保育で「こま」を製作。もう1件は「すもう」のため、同年齢。それ以外については、同年齢・異年齢の両方の記入となっている。
- ・「デイリープログラムのどの時間に遊んでいるか」 ほとんどの遊びが自由遊びの時間であり、活動の前後などでも手遊びを伴うものをしている。また、設定保育や行事の中にも遊びを取り入れてあると回答。
- ・「保育時の配慮」 それぞれの遊びで保育者の細やかな配慮が窺える記述となっている。遊ぶ前の環境を整える、遊びのルールの説明、遊ぼうとする子どもたちの年齢や発達の差に応じた援助、子ども同士のかかわりの見守り、わらべうた遊びではことばの持つリズムを大切に、テンポを変えることにより難易度を変え、繰り返し楽しめるようにする。

②「設問2 保育に伝承遊びを取り入れることで、子どもの発達に良いと思われる点」

1園を除き、他の全ての園で記入されており、伝承遊びが保育の現場で積極的に取り入れられ、日常的に遊ばれていることを示している。以下、回答記述から紹介する。

- ・触れ合って遊ぶことで情緒が安定する。

- ・膝の上、手をつなぐ、向かい合うなど触れ合って遊ぶことでやわらかな感性を育て、安心感を与え、人への信頼感を深めていく大きな力になっていると感じる。
- ・身体能力の向上。運動機能の促進。手、指、足の発達につながる。
- ・戸外で行える遊びなら、これからの（冬に向かう）時期、あまり身体を動かさなくなる子どもにとっても、喜んで行える。自然と体を動かして楽しむことができる。
- ・多人数でのかかわりが増えることで、仲間意識が芽生える。集団で遊ぶ楽しさを味わえる。
- ・同年齢児だけでなく、異年齢児、親子でも楽しめる。異年齢児との触れ合い。親しみや思いやりの心が育つ。
- ・遊びのルールを知ることで、社会での秩序を学ぶ基礎となる。
- ・けんかやそれに伴う葛藤を経験することで、自主性・協調性など人間関係を学ぶ。
- ・友だちとの協力が必要になる事もある。
- ・縦割りで遊び、上の子から遊びを教えてもらい下の子へ伝えていくことで、上の子への尊敬の気持ちや、下の子への労りや思いやりの気持ちが育つ。
- ・少しの玩具、または玩具なしで遊べるので、ルールを工夫したり変えたりと他児とのコミュニケーションがとれる。
- ・日本古来の遊びを深めていくことで、祖父母などとの結びつきを強めていく。
- ・手遊びは触れ合うことで子ども同士や保育者とのコミュニケーションを取ることができ大切。
- ・集団遊びが上手になり、縦のつながりが強くなる。
- ・たくさんの道具を使わず遊べるので、自分たちで考え、作る力が身に着く。
- ・様々な語彙の習得。遊びを通して数や数量、またその違いや文字などを知ることができる。
- ・ことばの心地よいリズムと温かさで子どもたちを楽しませ、勇気づける。
- ・簡単な歌、遊びでも伝承遊びを取り入れることで、昔ながらの歌、遊びを受け継ぎ、大事にしていくことができる。
- ・わらべうたにより、言葉を話せない子も保育者の真似をし、言葉を覚えたり、リズムを楽しむことができる。

4. 追加報告および実践報告

平成20年のアンケート調査では、上記のような結果が得られたが、更に実態を把握するため、平成21年8～9月にかけて下関市内の保育所での2回の実習を体験した本学保育学科の11名の学生に再度アンケートの協力を求め追加調査を行った。10月、アンケートは手渡しでその場で100%回収した。実習先となった保育所12園中9園は昨年無作為に選出したアンケー

トの依頼先と異なる。

設問は「伝承遊びをしていましたか」「どのような遊びでしたか」の二問。全て（12園）の園で伝承遊びをしていたと回答。「どのような遊びでしたか」の回答は、昨年のアンケート集計（個人、保育所・幼稚園）とほぼ同じだが、集計に上がっていなかった遊びで「折り紙」という回答も多かった。学生も実習の中で子どもと一緒に折り紙を楽しんだと報告し、筆者も実習先の保育所・幼稚園で折り紙の実践を日常的に観察した。

実践として筆者（川野）も平成21年8～9月の保育所と10月の幼稚園の実習中、自由遊びの中で積極的に「伝承遊び」を取り入れ子どもたちの反応を観察したので、以下報告を行う。

室内での遊びとして「わらべうた遊び」「折り紙」「あやとり」「ままごと」「かごめかごめ（室内、外どちらでも可能だが今回は室内）」を、外遊びとして「ぐるぐるじゃんけん」「ゴムとび」「おにごっこ」「ままごと」を実践した。

「わらべうた」は子ども同士でも口ずさみ、触れ合い遊び「なべなべ、底ぬけ」や、手合わせ「せっせっせっ」で始まる遊びなど楽しんでいる。「かごめかごめ」は、年長児クラスのみで行った。

ルールの理解はできるが、「だあれ」で後ろにいる友だちを言い当てるのが難しく、ヒントを出すのが、ヒントの意味が理解できず、答えを教える子どもがいた。他の子どもが勝手に答えられないよう保育者が声かけし、数回遊ぶ内に全員が遊びのルールを覚えていた。園庭で行った「ゴムとび」では、3～5歳児が集まり遊び始める。始めのうち順番に跳ぶことが難しかったが、保育者の声かけで2列に並び順番を明確にしてからは割り込みで文句を言う子どももいなくなった。おにごっこ、ままごとについては、子どもたちが日常的に遊んでおり、子どもの遊びに参加した形で実践した。

しかし、「かごめかごめ」と「ゴムとび」の実践では保育者の声かけにより、子どもたちは私語を控えルールを守り遊びが成立したが、遊び始めた時の子どもたちの期待に満ちた表情や意欲的な言動は見られなくなった。

以上を通じて「伝承遊び」の導入において、ルールを教えることと、指示の出し方で、遊びが指導的なものとならないよう配慮することは、保育所や幼稚園という集団生活の場では重要なポイントであると気付いた。本来の「伝承遊び」の持つ子どもの主体性、子どもなりの工夫ある遊びの展開を損なう可能性があると考えためである。

子どもたちにとって保育者は大きな存在である。保育者の言葉かけ如何によっては、初めての遊びにおいて、子どもが持つその遊びへのイメージや可能性を限定してしまう危険もあるのではないかと考える。もし、保育者が「～しなさい。」という言葉かけをした場合、自発的な遊びが一気に色あせ、受動的な遊びへと転じてしまう可能性があるだろう。

他方、異年齢での遊びで年長児が下の子どもに同じ口調で言った場合はどうか。「ぐるぐる

じゃんけん」遊びの際、ルールを理解して遊んでいた年長児が、ぐるぐる回ることが楽しい年中児に向けて、「～したらいけん。〇〇して。」とルールを守り遊ぶよう声をかけていた。一度では守れなかった年中児も、ルールを守って楽しんでいる年長児を見ているうちに、見様見真似でルールを守り遊んでいた。翌日、その年中児は他の子どもを「ぐるぐるじゃんけん」に誘い、ルールを教えていた。その年中児は遊びを通してルールを理解し、楽しむことができたことを、他の子どもへも伝承していたということだろう。

異年齢での遊びは、縦、横、斜めというかわりが生まれる。同年齢だけでは気付かないことも、自分より年下がいることで「配慮」が必要となり、自分より年上がいることは「行動や考え方の手本」として捉えることになる。更に「配慮」や「手本」は同年齢の友だちに対しても向けられるものであろう。「ぐるぐるじゃんけん」の例は、「伝承遊び」が異年齢を繋ぐ遊びとして機能しているといえるだろう。

5. おわりに 一 所感 一

「遊び」は自らの知恵と身体と新たに吸収した知識に裏付けられながら、次の展開へと繋がっていくものである。保育者は子どもたちの主体性を尊重し、必要な援助は何かを目の前の子どもの姿から掴み取りかかわっていくことが求められる。それは「伝承遊び」についても同様であろう。

昨年から下関の「伝承遊び」を探ってきたが、子どもが主体性を発揮し、心身ともに十分に遊び込める「遊び」の一つとして、「伝承遊び」を保育現場に積極的に取り組むことの意義を再確認することができた。伝承され続ける遊びには、「遊び」だけでなく、その時代の子どもの姿も伝承されているのではないだろうか。子どもたちの知恵と力を十分に発揮できる「伝承遊び」を途絶えさせない取り組みが保育者の側にも必要だろう。社会変化に伴い地域の子どもの同士の中で遊び継ぐことが困難になってきた現代、保育現場での取り組みが伝承の一つの形になるのではないかと考える。

「伝承遊び」を探ることで、子どもが「子どもらしく」育つヒントが「遊び」の中にあるということが確認できた。筆者も保育者として日々成長する子どもの変化を感じ取りながら、その環境を整え、自らも遊びを通して子どもの育ちを援助していく姿勢を持ち続けたいと考える。

参考文献

1. 浅野健二：「新講 わらべ唄風土記」，柳原書店，1988
2. 内田伸 河北邦子：「日本わらべ歌全集 19 下 山口のわらべ歌」，柳原書店，1992
3. 下関市市史編集委員会：「下関市史・民俗編」，下関市，1992
4. 下関市保育連盟 保育士会発行：「下関の伝承あそび第 2 版」，2004
5. 遊びの価値と安全を考える会編者：「もっと自由な遊び場を」，大月書店，1998
6. 子どもの遊びと街研究会代表 木下勇：「三世代遊び場図鑑」，風土社，1999
7. 斎藤孝・山下柚実：「五感力を育てる」，中央公論新社，2002
8. 清川輝基：「人間になれない子どもたち第 4 刷」，柊出版社，2003
9. 神山潤：「眠りを奪われた子どもたち」，岩波ブックレット No.621，2004
10. 澤口俊之：「幼児教育と脳第 8 刷」，文藝春秋，2004